

インド手工芸開発と企業家的生産者の誕生

——インド西部カッチ地方、職能集団による更紗生産の事例より

金谷美和

I はじめに

本稿の目的は、インド政府による手工芸開発の施策のひとつに、企業家的な手工芸生産者の育成があったことを示し、企業家的に生産形態を展開させた事例として、染色業を生業とする職能集団カトリーを位置づけ、生産形態の変化が具体的にどのようなプロセスで行われたのかについて明らかにすることである。インド西部グジャラート州カッチ地方で、染色を生業とする職能集団カトリーは、従来は狭いローカル社会において、顔の見える特定の「顧客」の

ために更紗製品を生産・販売していたが、一九七〇年代より、不特定多数の消費者向けの製品を大量に生産するようになった。このような、生産方法の転換の背景には、インド社会の変化があり、その変化に対応して生産者の生業を継続させ、農村経済を復興させようとするインド政府の手工芸開発があった。

カッチ地方では、一九七四年よりグジャラート州政府による手工芸開発が始まった。カトリーの生業である染色業に対する開発の成果は大きかった。更紗産地であるダマルカー村の工房数は、手工芸開発前は七軒だったのが、二〇〇一年には七五軒に増加している。カッチ地方の手工芸開発は、グジャラート州手工芸開発公社によって実施さ

れた。設立初期のダイレクターであるB・B・バシン氏は、この地方の手工芸開発に精力的に取り組み、大きな成果を残した。しかし、すべての手工芸の職能集団にその成果がもたらされたわけではない。職能集団のなかには、政府の手工芸開発の施策の対象になりつつ、企業家的な生産形態に転換することができなかった例もある。カトリーが開発の施策を最大限に活用することができたのは、彼らの生産するのが布商品であることと、彼らが従来、物を作る職人であると同時に、物を流通、販売する商人でもあったからだというのが、筆者の見解である。筆者はこのようなカトリーの生産者としての特徴を「職人・商人」と定義したことがある（金谷 2007a: 92-96）。

カトリーは、複数の異なる技法の染色業に携わり、各自特定の技術によって染色を行っていることが多い。そのなかで絞り染め布は、アラブ諸国や東アフリカに輸出されたこともあり、絞り染め布生産に従事するカトリーは、早くから親方と職人の分業を行い、各地にエージェントを置くなど、産業化が進んだ（金谷 2007a: 135-144）。グジャラート産の更紗は、九世紀からエジプトなどに輸出されていたことが考古学的資料から明らかになるなど、国際的な商品として流通していたが、カッチ地方のダマルカー村の更紗生産については、筆者の調査したところでは、そのような遠方に流通していた記録はない。ダマルカー村のカトリー

は、一九六〇年代までカッチ内の狭い流通圏において、地の需要に応じて更紗を生産しており、インドの他地域の都市部や海外向けの更紗生産は、一九七〇年代に手工芸開発の施策を活用して以降に始められた。

まず、更紗生産者たちが、近隣農村に居住する特定の「顧客」をいかにして失っていったか、その背景には何があったのかについて論じ、さらに「消費者」に向けて、市場経済に対応した製品の生産を行うようになった過程について論じる。そのことによって、カトリーを企業家的生産者の例として提示する。

筆者は、二〇〇一年よりダマルカー村のカトリーと更紗生産について調査を行っている。本稿での議論のもとになっている主なデータは、二〇〇七年と二〇〇八年に行われた調査によって得られた。ダマルカー村出身の工房親方イスマール氏の所蔵する八二五点の更紗用木版の調査は、二〇〇八年に行った。これらの木版は、一九五八年から二〇〇六年に製作、使用されたものであり、筆者は、イスマール氏とその兄弟から、製作年、製作者、文様名称について聞き取りを行い、写真撮影を行った。

Ⅱ 職能集団カトリーと更紗

1 カトリーについて

カッチ地方において更紗の生産に従事しているのは、カトリーという集団である。英国植民地期の、英国人によって記録されたセンサスや地誌にも、染色業に従事するカトリーについての記述を見ることができる。カトリーは、ヒンドゥーからの改宗ムスリムで、カースト的な内婚規制や職業の世襲といったまとまりを持つカースト的集団のひとつである[＊]。

従来の研究では、インドのムスリムの多くはヒンドゥーからの改宗者で、ヒンドゥーのカースト的な集団を維持している (Ansari 1960: 35-51)。グジャラートのこのような集団はナート、あるいはジャマアトと呼ばれている。また、ミシユラによると、この集団は、イスラームの平等主義と矛盾することが人々に認識されながら求心力をもち、内婚などを通してより強化されており、グジャラートのムスリム社会にとって重要な社会単位である (Mishra 1985: 139-149)。

カトリーは、カッチにおいてムスリムのカースト的集団のなかで三番目に人口が多く、よく組織された組織を持つ

ている。ムスリムのカースト的集団が、同業者組合（ギルド）として機能している例は、グッドフレンド (Goodfriend 1983: 135-136) らによっても指摘されている。グッドフレンドの事例では、徒弟制のもとでの職業訓練、仕事の技術や雇用を守ることを行い、自分たちのカースト内で特定の産業を占有し、他カーストからの搾取をさけるために団結しているという。

カトリーは、絞り染め、更紗など多種類の技術による染織品生産に携わっており、カッチ地方では主に染色に従事する「染色カースト」として認知されてきた。また、カトリーの従事する仕事で二番目に多いのは、木工や大工である。このことは、カトリーが更紗に用いる木版を自分たちで製作することにも関係している。

2 更紗と木版

更紗とは、多色に染め分けた布のことで、通常は木綿布である。防染料を布につけて染めることで、防染料を付けたところを染まらないようにする方法と、媒染料を付けたところが染まる方法を組み合わせて、複雑なデザインを染め付ける（写真1）。防染料と媒染料を布に付着させるために、木型に模様を彫り込んだ木版を用いる。通常ひとつの文様を多色に染め分けるために、複数の木版を用いる。



写真1 木版を捺して媒染料を布に付着させる工程（2008年）

木型は、サーゲ（学名 *Tectona grandis*）という木を素材にして、ノミや手動ドリルを用いて彫刻される。カッチ語で更紗技法のことをチャーペル、更紗生産に用いる木版のことをパルあるいはポールと呼ぶ。現在では、カッチ語での呼称に加えて、英語で更紗技法のことをブロック・プリント（木版捺染）、木版のことをブロックと呼ぶことが多い。ひとつの木版は、およそ二千メートルの捺染に耐える。それを超えると、木版の模様部分が欠けたりして使用できなくなるため、新たに木版を作り直すことになる。したがって、更紗を生産する工房には、使えなくなった木版が大量に保存されていることが多い。筆者は、更紗製品のデザインや技法の変化について明らかにするために、このような保存されている使用済みの木版の調査を行った。



写真2 アジュラクを着用する男性（カッチ県、2008年）

カトリーが生産に従事する染織品のなかでは、絞り染めの布が、婚礼衣装など晴れ着として使用されることが多いのに比べて、更紗は、普段の生活のなかで使われることが多いものであった。カッチ地方で生産されていた更紗製品には、女性のスカートや被り布、男性用の頭に巻く布として用いられているルマールやガドロ（ベッドシーツ）、アジュラクと呼ばれる両面染めの布などがある。アジュラクは、カッチ北部バンニ地方からスインドにかけて、牧民の男性が腰に巻いたり、肩掛けにしたりして用いる（写真2）。アジュラクは、模様がずれないように布の両面から捺染したもので、色は洗うほど輝きを増し、また身体にまとうと身体を冷やすため酷暑のなかで好まれたという。カッチ地方で現在最大の更紗の産地となっているのは、

ダマルカー村であり、二〇〇一年には七五軒の工房があった。その他には、ブジ市、アンジャール市などに工房がある。政府の手工芸開発後、更紗産業が拡大し、従来はカトリーのみが生産に携わっていた更紗の生産工程に、非カトリーの人々も参入するようになった。

3 ダマルカー村のカトリーと

「顧客」との関係

ダマルカー村は、インド西部グジャラート州カッチ県の中南部の内陸に位置している。一九九一年の国勢調査によると、村の広さは約三二〇一ヘクタール、世帯数三七五戸、人口一九九一人であった（District Census of Gujarat 1991: 224^{*2}）。村の居住カーストは、ラージプート、コリー、バニヤー、ハリジャン、クンパール、ムスリムのカトリーなどである。ダマルカー村は、農業を生業とするヒンドウのラージプートと染色を生業とするムスリムのカトリーが、人口を二分しており、これまで地方自治制度である村落パンチャーヤトの代表は、どちらかのコミュニティから出してきた。

カトリーは、カッチの藩王マハラオ・バルマルジー（Maharao Bharmali）在位一五八五―一六三二に招かれて、現在はパキスタンに位置するスインド地方からダマルカー

村に移住してきた。染色に適した川があったことから、この土地に居住することにしたという伝承がある。スインドからダマルカー村に移住した最初のカトリーの男性は、ジワという名で、ヒンドゥー教徒であった。彼の息子であるジンダが改宗してムスリムになり、名前もアブバカルと改名した。ダマルカー村に居住するカトリーのうち、七つの父系親族集団が、アブバカルの子孫であり、同じサブ・カースト（ヌク）に属する。アブバカルの子孫のうちの一部は、インドがパキスタンと分離した際に、パキスタン側のスインドに移住した。ダマルカー村には、近隣村から移住してきた三つの父系親族集団が居住しており、二〇〇一年には合計一〇の父系親族集団が居住していた。筆者が今回の研究のために話を聞いた親方イスマール氏は、ジワから数えて九代目に当たる。

二〇〇一年にカッチ地方を震源地とする巨大なインド西部地震が起こり、ダマルカー村は震源地に近かったため七十数名の死者を出すという大きな被害を受けた。震災後、カトリーは、復興援助金を得て村の移転を進めている。

カトリーは、ダマルカー村周辺とカッチ北部バンニ地域に居住する牧畜民や農民のための衣服や寝具の染色を行ってきた。聞き取り調査によると、アブバカルの子孫である七つの父系親族集団は、それぞれ特定の「ゲラーク（顧客）」コミュニティを持っていた。それらは、農民

カーストのカンビー、牧畜を産業とする少数民族のラバリー、ムスリムの牧畜民ムトワ、ノレ、ジャト、ヒンゴラー、サーマー、スムラー、ラヘシー、ハリプトラー、ウタなどであった。七つの父系親族集団は、それぞれの顧客が重なり合わないように、互いに異なるコミュニティの顧客を持っていたという。カトリーは、これらの「顧客」たちと直接的で対面的な取引を行っていた。カトリーは定期的に顧客の村を訪れ、注文を受けたり、注文を受けて染色した更紗を届けたりした。グジャラート地方は、一般にインドの他の地域に見られるような定期市がなく、カッチ地方においても、農村部において布は直接取引されるものであったようだ。

たとえば、イスマールールの父であるモハマドは、ヒンドウーの牧畜民ラバリーを顧客に持っていたが、ラバリーから直接注文を受けて行う更紗の生産・販売を一九七〇年代まで行っていた。顧客から注文を受けて製作するために、生産量も現在に比べると少数であった。

このように、各父系親族集団は、特定のコミュニティが使用する更紗生産に従事していたことがわかる。しかし、その関係は、インドの職能集団と土地所有カーストとの間に一般的に観察される、ジャジマーニー関係に依拠したものではなかった。ジャジマーニー関係は、同じ村落内の異なるカースト間に結ばれた世帯同士の排他的な関係であ

り、それには経済的、宗教的な義務・権利の関係が含まれる。カッチでは、土器作りや機織りを専業とするカーストが、村の農民カーストなどとこのような関係を結び、土器や織物を農作物と交換していたことが明らかになっている (Fisher & Shah 1987; 金谷 2007b: 580-584)。しかしカトリーは、特定のコミュニティに属する固定的な「顧客」を持っているものの、ジャジマーニー関係のような義務の伴うパトロン・クライアント関係としてではなく、貨幣を介して更紗の売買を行っていたことが聞き取り調査から明らかになった。

Ⅲ 更紗生産の変化

1 政府の手工芸開発

ダマルカー村は、ここ数年は、伝統的な染色技術を継承している更紗の産地として有名になり、世界中の染織研究者が訪れる場所になっている。しかし一九六〇年代から七〇年代初頭には、カッチの更紗は衣服や寝具といったローカルな需要が減少し、産業として危機的な状況にあった。ダマルカー村以外の更紗生産者のなかには、この時期に廃業したところもある。

ローカルな需要が減少した背景のひとつに、インドの独立によるカッチ地方とスインド地方の分断がある。ダマルカー村のカトリーの主な顧客であった牧畜民は、カッチ藩王の保護を受けながら、スインド地方との間を自由に行き来して生計を立てていたが、インドが英国から独立した際に、スインドはパキスタンに編入されてカッチと分断されてしまい、自由な往来ができなくなった。牧畜民は、カッチに降雨がないときには、スインドに赴いて農作業の労働を行うことで現金収入を得て、カトリーから染織品を購入していたという[※]。インドとパキスタンの分断によって生計手段の一部を失ってしまった牧畜民のなかには、更紗を購入できない者もでてきたであろう。

また、カッチ地方は、グジャラートの大陸部分との間に通常は水をたたえた干潟が広がり、地形的には島のように独立している。独立前までカッチ地方は、海路を通じてスインド地方、グジャラート州カティアワール（現在のサウラーシュトラ）地方、ボンベイ（現在のムンバイ）との交易があった[※]。独立後、グジャラート州の大陸側との間にある干潟に架橋され、カッチ地方はグジャラート最大の商都アフマダーバードとの交易がさかになり、海路による交易は衰退していった。アフマダーバードは繊維産業のさかんな都市であり、アフマダーバードからの繊維製品の流入も、更紗生産に影響を与えたであろう。

ダマルカー村周辺とバンニー地域に居住する「顧客」向けに更紗を生産・販売していたダマルカー村のカトリーは、一九七〇年代半ば以降は、次第にカッチ外の都市部に居住する人々に向けて更紗を生産・販売するようになった。カトリーは、それまでは顔の見える顧客のために更紗を生産していたが、このときから不特定多数の消費者のために更紗を生産するようになったのである。

その転機になったのは、一九七〇年代半ばにカッチ地方で始まった州政府による手工芸開発である。そして、そのキーパーソンとなったのが、B・B・バシンである（バシンについては、本特集の中谷論文を参照）。バシンは、一九七四年にグジャラート州手工芸開発公社（以降、グルジャリーと表記する）のダイレクターとして就任すると、グジャラート州の各地において手工芸品とその生産者調査のために精力的に視察を行った。そのような手工芸の調査中に、バシンは偶然イスマール父であるモハマドと出会い、それ以降、ダマルカー村の更紗生産者に対する州政府の支援が始まった。

カッチ地方は、年間平均降水量が三五〇ミリメートルの半乾燥気候であり、安定した農業生産を得るにはきわめて厳しい環境である。したがって、農村経済の発展のために、手工芸が重点的に開発の対象となってきた。

グルジャリーがまず行ったことは、モハマドに対する商

品の発注である。グルジャリーは、店舗を持っており、その店舗で販売する製品を各生産者に注文していた。グルジャリーは、モハマドに、更紗のベッドカバーを注文した。都市消費者向けのベッドカバーを製作したことのなかったモハマドの更紗製品は、いったんはリジェクトされた。しかしその代わり、バシンは国立デザイン研究所のデザイナーをダマルカー村に派遣し、デザイナーのチームは二週間村に滞在して、カトリーと共同で商品開発を行った。デザイナーたちが試みたのは、①天然染料の復興、②木版の外注化、③伝統的な模様を踏まえた新しい模様の開発、④模様のずれなどを排するなど、徹底した品質管理の導入などであった。

2 マーケティング教育

政府による手工芸開発の施策のひとつにあったのは、手工芸生産者に対するマーケティング教育である。このマーケティング教育について、中谷（本特集論文）は、グルジャリーにおいて手工芸開発のキャリアをスタートさせたバシンが、早くから重要視したものであり、彼の試みが政府の施策に反映されたと述べている。

インド中央政府による手工芸開発は、一九五二年に設立された全インド手工芸局（All India Handicraft Board）と、

その初代長官に就任したカマラデーヴィー・チャットパディヤエによって推進された。一九八〇年にインディラ・ガンディーが二度目の首相として就任すると、積極的な文化外交のなかに、手工芸が取り入れられるようになっていった。そのひとつに、インド祭（Festival of India）があり、ジャヤカルは、インド祭実行委員会の総裁として、企画実行を行った。

イギリス（一九八二年）、アメリカ（一九八五～八六年）、フランス（一九八五～八六年）、日本（一九八八年）において、インド祭が開催され、インドの文化と産品が紹介された（Festival of India 1982a）。その結果、欧米をはじめとするグローバル・マーケットにもインドの手工芸が流通するようになった。イギリスとアメリカのインド祭では、「優れた職工展（ヴィシユヴァカルマー）」展が開かれた。この展覧会では、現在製作可能な染織品の技術の最高峰を展示するという目的のもとに、インド中の職人に作らせた染織品が集められ（Festival of India 1982b）、展覧会は、染織関係者やファッション関係者の注目を浴びた。カッチ地方からは、絞り染め生産者のアミナベン・イスマイル・カトリーという女性が、アメリカで行われたインド祭に参加した（金谷 2007a:36）。

このアメリカでのインド祭をきっかけにして、職人の「デモンストレーション」というマーケティングの手

法が始まった。アメリカでのインド祭のときには、人形遣いや土器作り、絵師などが同行し、アメリカの人々の前でパフォーマンスや手工芸の製作を実際に行って見せた。この手法は、大変にユニークである。それは、このデモンストレーションが、単に手工芸を販売するための手法ではなく、職人の教育の機会として捉えられていたことである。つまり、手工芸の作り手が、直接消費者にデモンストレーションしたり、販売したりするという関わりの中で、消費者がどのような商品 را求めているかということとを直接知ること、つまり作り手がマーケティングを実践のなかで学ぶことのできる場として捉えられたのである。デモンストレーションの場所として設置されたのは、インド各地において定期的に開催される手工芸祭、常設の手工芸祭会場であるディッリー・ハート（ヒンディー語でデリー定期市）^{*}などである。また、国立手工芸博物館には、ヴィレッジ・コンプレックスと呼ばれる一角が設置され、招待された職人が、デモンストレーションを行っている。

インド政府による手工芸開発の施策のなかで、カトリーの利用度が最も高かったのは、手工芸祭への参加、ローンの貸付、「ナショナル・アワード」、トレーニングコースの講師などである（金谷 2007a:155-160）。「ナショナル・アワード」とは、優れた職人と織工のための国家による授

与（National Award for Craftsperson and weaver）^{*7}とある。報奨者は、海外を含めた各種の手工芸祭への招待、年金の特典があるほか、手工芸の技術訓練クラス事業を利用することができるとある。また、報奨者の名は公開されるため、手工芸品に関心のある商人から仕事を依頼されやすくなる。

ダマルカー村のカトリーも、ナショナル・アワードを受賞し、デリーや海外のデザイナーからの仕事を受注したり、海外の展覧会に招待されるなどした。そのことで、諸外国における手工芸に対する高い評価を知り、カトリーが手工芸の仕事に自信と誇りを持つようになったことは大きかった。このような施策を通して、生産者たちは直接、グローバルな市場につながるようになったのである。また、海外の展覧会に招待され有名になったカトリーの工房には、海外からのツーリストが直接見学に訪れるようになった。カトリーは、外国人と接するなかで実践的に英語を学び、英語でツーリストに対して工程の説明を行うようになった。ダマルカー村の名前は、更紗産地としての知名度を急速に増していった。

このように、ダマルカー村のカトリーは、マーケット教育の効果を最も享受した生産者であるといえる。また、政府によるマーケット教育の内容をみると、生産者が政府機関やNGO団体の仲介を通さず、直接海外市場や国内市場と取り引きする力をつけることを目指していたことは明らか

である。顔の見える顧客に対しては、相手が求める製品がどのようなものか直接尋ねることができ、その求めに応じた製品を生産することができた。しかし、市場経済のなかで顔の见えない不特定多数の「消費者」に対して製品を生産する場合には、マーケティングを認識し、個人の才覚で販売網を獲得していく能力が必要であると考えられたのである。

IV 企業家的な生産システムへの変化

ダマルカー村のカトリーが、不特定多数の消費者に向けて商品を生産する、市場経済に適応した生産者として更紗生産を展開していった過程を明らかにするために、生産システムの变化を三つに分けて考察したい。①生産量の増加、②デザインの多様化、③消費者の好みへの対応である。

1 生産量の増加

ダマルカー村のカトリーによる更紗の生産量は、手工芸開発の対象になって以降、明らかに増加している。表1は、二〇〇七年に調査した、ダマルカー村に現存する五一軒の工房の一カ月あたりの染色量をまとめたものである。最も少ない工房で、五〇〇メートル、最も多い工房で三万メー

トルの染色量がある。手工芸開発以前に、ダマルカー村の各工房で、どのくらいの染色量があったのか調査されていないため、数量的に比較することは難しい。しかし、聞き取り調査においてカトリーが、顧客の注文に応じて更紗を生産し、直接顧客に届けていたということを考慮すると、一カ月当たりの染色量は、現在のように数千メートルや数万メートル単位で染色していたということはありえず、せいぜい数十メートル、多くとも百数十メートルの単位で生産していたであろうことが推測される。

このような生産量の増加は、どのようにして可能になったのだろうか。ひとつは、親方を中心とした「工房システム」での生産であり、もうひとつは木版の外注化による生産工程の分業化である。

現在、更紗の生産は、親方のもと複数の職人たちによる共同作業によって行われている。親方は、セートと呼ばれ、すべての工程を統括している。親方のもとで生産するシステムは、とくに決まった現地名による呼称があるわけではない。カトリーは、個別の更紗の生産ユニットのことを、工房（カールカーナー）を経営する親方の名前と呼んでいる。日本語の工房という言葉が最も適切に感じられるために、本稿では便宜的に、親方を中心とした生産ユニットを「工房」と呼び、この生産システムを「工房システム」と呼ぶことにする。更紗の工程は、単純化すると、①生地

表1 ダマルカー村工房の染色量

工房の番号	1ヵ月当たり染色量(m)
1	6,000~10,000
2	6,000~10,000
3	1,000~2,000
4	1,000~2,000
5	1,000~2,000
6	1,000~2,000
7	3,000~4,000
8	4,000~5,000
9	不明
10	不明
11	1,000
12	不明
13	5,000
14	1,500
15	2,000
16	2,000
17	3,000~4,000
18	6,000
19	不明
20	3,000
21	3,000
22	3,000~3,500
23	6,000
24	不定
25	5,000~6,000
26	3,000
27	不定
28	6,000
29	30,000
30	700~800
31	2,000
32	2,000
33	不明
34	6,000
35	5,000
36	1,000~3,000
37	稼働せず
38	2,500
39	3,500
40	2,000
41	不明
42	6,000
43	5,000
44	3,000
45	4,000
46	4,000
47	4,000
48	3,000
49	不明
50	5,800
51	500

水洗い、②下処理による生地タンニン化、③捺染（木版を用いて防染料と媒染料を布に付着させる）、④染色、⑤生地*8の水洗いと天日干し、という五つの工程から成り立っている。このすべての工程が、親方の統括のもとに行われる。工房は、親方の家族による経営で、親方の息子たちが、染料の配合やインディゴ染色といった、生産作業のうちの重要な工程を行っている。親方は、職人の雇用を行い生産量の増加に対応している。

木版の外注化は、手工芸開発以降に始まった。それ以前は、ダマルカー村のカトリリーは、自分たちで木版を製作していた。現在でも、ダマルカー村のカトリリーの幾人かは、木版の製作を行っており、技術の伝承がなされている。一九七〇年代にグルジャリーがダマルカー村に派遣したデザイナーは、木版を専業の職人に外注することを勧めた。

グジャラート州アフマダーバードの近くにペタプルという街があり、そこでアフマダーバードで生産されていた更紗のための木版が製作されていた。グルジャリーは、ペタプルの木版製作も手工芸開発の対象にし、木版産業を活性化することを試みたのである (Trivedi 1961)。

ひとつの模様を捺染するのに複数の木版が必要であるため、木版は常にセットで製作される。このセットは、現在数百ルピー（数百円）から四千ルピー（約八千円）にて注文に応じて製作される。木版の外注によって、カトリリーは染色の仕事に専念することができるようになった。また、木版の耐用期間は、約三千メートルの捺染量に相応するため、生産量が増加した現在では、頻繁に木版を作り替える必要がある。木版の外注は、木版の作り替えの増加に対応しているのでもある。

(注)2007年の筆者調査をもとに作成。

2 デザインの多様化

カトリーが、特定のコミュニティに属する「顧客」の更紗を生産していたときには、製品のバラエティは限られていた。個人による好みや村ごと、製作者ごとの違いなどがあったが、それ以上にコミュニティ内の衣装の同一性が保たれていたためである。カッチ地方において衣装は、コミュニティの指標として機能していた（金谷 2007a, 2006）。もちろん、カトリーは、コミュニティ内の衣装の規範や好みを知り、それに合わせて更紗を生産すればよかったし、もっと細かい注文に応じようとすれば、直接顧客に尋ねればよかったのである。しかし、不特定多数の消費者に対しては、より多様な好みに対応して製品のバラエティを拡大する必要がある。また、服飾にはその時々々の流行に合わせた製品の生産が求められる。製品の多様化への需要が、生産者にもデザインという概念を持つことを促したのである。

グルジャリーが派遣したデザイナーは、新しい文様を創り、木版をベタプールで製作させた。写真は、ダマルカー村で最も早い時期にデザイナーが新しく製作した文様と木版の例である（写真3）。

デザイナーは、新しいデザインを作り出すために、ダマルカー村更紗の伝統的な文様を源泉とした。伝統的なデザ

インを活用するために、デザインを蒐集し、概観するため
の見本帳が作られた。カトリーは、更紗に用いてきた木版
に染料をつけて紙に押し、それに番号をつけて綴じて、見
本帳を作成した。見本には番号がつけられ、見本帳を見て
番号を示せば、見本と同じ文様を注文したり、文様同士を
組み合わせる新しいデザインを作ったりすることが可能に
なる。それをもとにして、デザイナーたちは、文様の組み
合わせや色を変えて、あらたなデザインの染織品を職人た
ちに注文したのである。

カトリーの方も、積極的に伝統柄の復刻を行った。たと
えば写真4は、ジマルデイという文様である。ジマルデイ

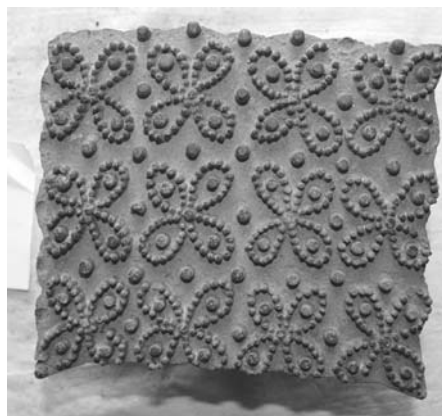


写真3 デザイナーによって新しく創られた文様の
木版。デザイナーはスレカ。木版はベタプールにて
1978年にマネック・マネルが製作



写真4 ジマルディ文様の木版（ダマルカー村、1988年。
イスマール製作）

は、従来はバンニー地域の女性が着用するスカート生地
に用いられていた文様である。

伝統的なデザインの復刻のひとつとして、興味深い試み
がある。それは、近年の染織史上の発見で、九世紀から
一四世紀にかけてグジャラートで製作されたと判定され
た更紗の模様のいくつかを復刻したことである。写真5は、
スラウエシ渡りの更紗を復刻したものである。もとのスラ
ウエシ渡りの更紗は、インドネシア、スラウエシ島のトラ
ジャ族の間に伝承されていた布で、ガイ（Guy 1998: 41）



写真5 スラウエシ渡り更紗の復刻

によると、一三四〇年プラス・マイナス四〇年に製作され
たとされる。同じ模様の更紗が、エジプトのフスタート遺
跡からも出土している。

スラウエシ渡りの更紗は、グジャラートで製作されたと
染織史研究者たちによって同定されたが、カッチ地方で生
産されたものであるかどうかは不明である。しかし更紗の
技法は近似している。この更紗を復刻したイスマール
は、自ら木版を製作し、オリジナルと同じ色での復刻を成
功させ、絹地のストールとして商品化した。この復刻され
た更紗は、単にデザインのバラエティーを広げたというだ
けではない。必ずしもダマルカー村の伝統文様とはいえな

い更紗の文様を復刻することで、ダマルカー村の更紗を、より大きなインド更紗の伝統という言説に結びつけることに成功したといえることができる。

3 消費者の好みへの対応

手工芸品の購買層のなかには、手工芸に「伝統」を強く求める人々がいる。そのことをカトリーは、グルジャリーのデザイナーからだけでなく、招聘されたデリーや海外の展示会で、手工芸に対する賞賛に接するなかで学んだのである。更紗の「伝統」とみなされるのは、ひとつは、カトリーが手工芸開発以前に生産していた更紗の文様であり、もうひとつは天然染料による染色である。

ダマルカー村では、すでに一九四〇年代には、天然染料に代わって合成染料による染色が行われていた。一九七〇年代にグルジャリーから派遣されたデザイナーは、天然染料による染色技術を復興させることを奨励した。そのときモハマドはすでに、天然染料による染色は行っていないが、染色の知識は持っていたので復興するべく尽力し、その技術を息子たちにも教授した。一九八三年にインドで出版された研究書（Varadarajan 1983）には、ダマルカー村のモハマドと息子たちが天然染料による染色を行っている様子が記録されており、彼らによって染色された布のサ

ンプルが添付されている。

天然染料による染色は、一九七〇年代当時よりも、現在の方がより価値を持つようになっていた。二〇〇一年のインド西部地震で大きな被害を受けたカッチ地方は、手工藝の復興のために多くのNGOが支援に訪れた。このときを契機にして、フェアトレード商品を扱うNGOがカッチ地方にも来るようになり、カッチの手工芸がフェアトレードという考え方で紹介されるようになった。フェアトレードとは南北間の公正な取引を行うことが基本的な理念であるが、その考え方のなかに、生産地の環境保全に配慮した取引を行うというものがある。一部の合成染料が製作者に与える健康問題や、染色後の廃水を適切に処理しないために生じる、環境に与える負荷などが欧米で問題になり、天然染料による染色製品が見直されたことが背景にある。カッチ地方の染色業者の間で、この時期から「エコ・フレンドリー」という言葉がさかんに使われるようになった。

実際には、天然染料であるから環境に優しいというわけではない。天然染料による染色には、媒染料として明礬などの化合物を使用するため、適切な処理をしないで廃水を流せば環境に負荷を与える可能性がある。合成染料のなかには「アゾ・フリー」と呼ばれる環境負荷に配慮した製品もでており、一概に天然染料の方が合成染料に比べてエコ・フレンドリーだということとはできないのである。しか

し、フェアトレードに関心を持っている消費者の要望に、天然染料の持つ「自然」で「環境に優しい」というイメージは応えているのだということが出来る。

ダマルカー村が地震で大きな被害を受け、村を移転中だということはずでに述べた。移転先の村の建設には、染色後の廃水を濾過する装置が計画されており、環境に配慮した村造りが目指され、すでにNGOによる支援が得られたということである。このようなカトリーの選択は、消費者からの評価というまなざしにさらされて生まれたといえる。

V おわりに

ダマルカー村のカトリーは、一九七〇年代初頭までは、主にダマルカー村近辺やバンニー地域の「顧客」向けに更紗の生産・販売を行っていたが、インドの社会変化を背景にして、その生産システムを企業家的なものに大きく転換してきた。その転換には、政府による手工芸開発が寄与したことを明らかにした。

カトリーは、都市居住者を主とする消費者に向けて更紗を生産するようになった。従来の顔の見える顧客ではなく、不特定多数の消費者の需要に応えるために、さまざまな試みを行った。生産量の拡大、分業化、商品のバラエティ

拡大、消費者の好みに応える商品作りなど、彼らの試みは、まさに市場経済における企業家のものである。カトリーは、市場経済に適応した生産者に転換していったということができるだろう。手工芸開発の施策によるマーケティング教育は、カトリーに関しては効果的であった。

ダマルカー村の更紗生産の発展には、海外市場を得ただけではなく、実は国内需要が拡大したことがより大きく寄与している。インド国内で伝統染織の消費者が拡大したのは、一九九〇年代の経済自由化以降のことで、本特集が対象にしている社会変動の時代である。インド政府や州政府は、手工芸品の店舗を作って、消費の拡大に努めたが、それが実ったのがこの時期であった。まず一九八〇年代後半におこったエスニック・シック（民族的なものがファッショナブルである）という流行であり、その流行を支えたのが、拡大しつつあったインドの中間層であった。

このように、ダマルカー村のカトリーにとって、転機を作ったのは一九七〇年代から始まった手工芸開発であり、それに加えて、一九九〇年代以降の中間層の拡大であったといっても過言ではない。カトリーは、社会変動で生まれたチャンスをうまくつかみ取って、染色業を展開していったことができる。このカトリーの事例は、社会変動を経済的社会的に上昇する機会として活用した経験であり、農村のモビリティ増加のポジティブな側面を明らかに

している。

なぜ、カトリーは状況の変化にうまく対応できたのだろうか。もちろんバシンと出会い、手工芸開発の支援を受けたという幸運があったことには間違いないが、その幸運を生かすことができた要因は何だったのか。

それは、彼らの生産物が布であることと、カトリーが生産者であるだけでなく商人でもあったという二つの要因が考えられる。一九世紀末までインドにおいて地方需要向けに手織りの木綿織物を生産していたのは独立織工であったが、それが工場制度に移行した。さらに、工場生産での織工は、商人に支配される織工と、同カーストの親方の経営する工場内で働く織工の二種類に分かれていった（柳沢 1973: 40）。そのような工場制度の登場は、鉄道の要地における生産地の集中、大量生産、鉄道による遠隔地への輸送といった木綿製品の生産・販売形態の変化とともに起こったのである（柳沢 1971: 61）。布が独立織工による生産から工場での生産に移行したのは、布が商品として遠隔地への大量輸送に向っていたことも理由のひとつである。土器は、布と同様に日常生活に不可欠な道具でありながら、生産地と消費地の地理的な距離が離れなかった点で布とは異なる*。

カッチ地方は、海路を通じた交易の拠点だったため、商品経済は早くから導入され、貨幣の鋳造も王政時代から行

われていた。ダマルカー村のカトリーは、商人的センスを持った「職人・商人」として更紗の生産を行ってきたこともあって、グローバル化に直面したインド社会の変動をサバイバルすることができたのである。商人的センスを持った者が、工房システムの親方になり、他のカトリーを職人として雇用することで、綿織物産業に見られたような他カーストの商人に支配されなかったということができる。だが、商人的センスを持ったカトリーにとっても、競争的な市場経済のなかを生き抜くのは困難なことに違いない。すべてのカトリーが、企業家的生産者に転換できるわけではなく、個人の才覚が以前よりもより重要な役割を果たすようになっていであろう。

カトリーが企業家的生産者として転換をはかることができた一方で、手工芸開発の対象となりながら、企業家になることに成功しない生産者もいる。政府による手工芸開発は、市場経済の勝者のみを成功とみなすのか、あるいは企業家的でない生産者も、生業を維持できるような仕組みを作って、より多くの生産者を支えるのか、どちらの方針を今後とっていくかが問われるであろう。同じ問いは、手工芸生産者支援に携わっているNGOにも投げかけることができるし、南アジアの手工芸商品をフェアトレードなどを媒介して購入する日本の消費者にも問われなければならぬだろう。

●付記

本稿は、以下の助成によって可能となった。科学研究費補助金特別研究員奨励費（二〇〇七年度～二〇〇八年度）「物質文化からみる災害復興研究——インド西部地震にみるローカルとグローバルの接触過程」（代表・金谷美和）、科学研究費補助金基盤研究（A）「南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究」（二〇〇六年度～二〇〇九年度）（代表・三尾稔）、科学研究費補助金基盤研究（A）「アジア・太平洋地域における自然災害への社会的対応に関する民族誌的研究」（二〇〇四年度～二〇〇七年度）（代表・林勲男）。

●注

*1 インドのカーストには、ブラーマン（司祭）、クシャトリヤ（戦士）、ヴァイシヤ（商人）、シュードラ（奴隷）の四つのいわゆるカースト（ヴァルナ）の存在があるが、一般には、より細分化されたジャーティーと呼ばれるものが、カーストとして認識されている。カースト内婚、職業の世襲のほか、他カーストとの共食や接触の制限などがある。

*2 国勢調査は一〇年に一度行われる。インド西部地震のために、二〇〇一年に行われる予定であったカッチ県の調査は中止された。そのため、カッチ県の二〇〇一年の資料は手に入れることはできなかった。

*3 この川は、一九九〇年代初頭に干上がり、以降、カトリーは地下水を染色に用いている。

*4 イスマーイル・モハマド・カトリー、一九九九年二月

一日、ダマルカー村にて。

*5 それに加えて、アラビア半島、東アフリカ沿岸部とも交易があった。

*6 一九九四年にデリー観光交通開発公社とNDMCのジョイントプロジェクトとして、手工芸と手織の開発長官の後援を受けて始まったものである。

*7 この制度は、まず手工芸生産者のためのものが一九六五年に始まり、一九八七年からは織工のためのものも始まった。全国から州単位で公募された職人のうちから選定され、現在では毎年四〇人の優れた手工芸生産者（master craftsman）と三〇人の国家報奨者（National Merit Certificate）が選ばれる（DCH 1995: 7）。

*8 ダマルカー村の更紗工程の詳細、また本版の製作については三尾・金谷・上羽（2008）を参照のこと。この映像は現在、国立民族学博物館のビデオテークにて常時公開されている。

*9 カッチ地方において、土器作りは手工芸開発の支援を受けつつも、企業家的生産者に転換している例を見ない。インドの他の地域においては、土器の製作者がアーティストとして評価されるようになっている例がある（Jam 1998: 60-69）。土器が、インド都市中間層のあいだでは、日用品としてよりも装飾品としての需要があること、そのために布製品のような規模の大きい需要が望めないことがあると推測される。

●参考文献

金谷美和（2007a）『布がつくる社会関係——インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』思文閣出版。

金谷美和 (2007b) 『職人』とは誰か——民族誌のなかのインド職人カースト像の再考」稲賀繁美編『伝統工藝再考 京のうちと』思文閣出版、五六五—五八八頁。

三尾稔・金谷美和・上羽陽子監修 (2008) 長編映画『インドの染色職人カトリー——絞り染めと更紗』国立民族学博物館製作。

柳沢悠 (1971) 「インド在来織物業の再編成とその諸形態——綿工業における工場制度の確立との関連で」『アジア経済』一二巻一二号、五一—六九頁。

柳沢悠 (1972) 「インド在来織物業の再編成とその諸形態——綿工業における工場制度の確立との関連でⅡ」『アジア経済』一二巻一二号、三三—五四頁。

Ansari, Ghaus (1960) *Muslim Caste in Uttar Pradesh: A Study of Culture Contact*. Lucknow: The Ethnographic and Folk Culture Society.

Barnes, Ruth (1997) *Indian Block-printed Textiles in Egypt: The Newberry Collection in the Ashmolean Museum, Oxford*. Oxford: Clarendon Press.

District Census of Gujarat, Kutch District. (1991) p.224.

(DCH) Office of the Development Commissioner for Handicrafts (1995) *Directory of National Award Winners 1965 to 1993*. New Delhi: Ministry of Information and Broadcasting, Govt. of India.

Festival of India (1982a) *Aditi: Festival of India in UK*. New Delhi: The Handicrafts and Handlooms Exports Corporation of India Ltd.

Festival of India (1982b) *The Master Weavers*. Bombay: Festival of India in UK.

Fisher, E. and Haku Shah (1987) Some 19th Century Bgaras Pata or Jajmani Documents of Muslim Potters in Kutch (Gujarat, India). *Verhandl. Naturt. Ges. Basel*. 97: 103-120.

Goodfriend, Douglas E. (1983) Changing Concepts of Caste and Status among Old Delhi Muslims. Imtiaz Ahmad (ed.), *Modernization and Social Change Among Muslims in India*. Manohar. pp.119-152.

Guy, John (1998) Woven Cargoes: Indian Textiles in the East. Thames and Hudson.

Misra, S.C. (1985) *Muslim Communities in Gujarat*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Mohanty, B.C., K.V. Chandramouli, H.D. Naik (1987) *Natural Dying Process of India*. Ahmedabad: Calico Museum of Textiles.

Surti (1995) *India's Artisans: A Status Report*. New Delhi: Surti.

Trivedi, R.K.

(1961) *Census of India Volume V PartVII: A Selected Crafts of Gujarat 19*. Block Engraving at Pethapur.

Vardarajan, Lotika (1983) *Traditions Textile Printing in Kutch: Ayrakh and Related Techniques*. Ahmedabad: The New Order Book Co.

(かねたに・みわ／国立民族学博物館)